

苦悩の切実さなどが見事に描かれている。ここに登場する人物たちの言動は、現代の我々に生き生きと迫り、訴えかける何かをもっている。

13世紀初頭に中高ドイツ語で書かれた原典は、当時の読者に古雅な響きを感じさせるように意図して書かれている。そのような語彙語法が、原典読解を困難にしている。そこで、本書では読み解く上で肝要な語彙語法に関する事項、即ち「直喩、隠喩、登場人物の換称、人称交替、代名詞先置」を扱い、また文化史的な側面として「権力支配の象徴としての投槍、騎士でもある楽人、古楽器、ジークフリートの飲んだ酒」などを取り上げている。地理的には、西はアイスランドから東はハンガリーに至る広大な地域を舞台にしている、古代に栄えた町の名前も出てくる。本書では、そのような地名関連の詩節にも力点を置いている。私はこれまで、叙事詩に描かれている地に何度か足を運び、その風土に身を置き、叙事詩の舞台の雰囲気を実感し、古代の人々の心に想いを馳せてきたが、その一端を第11章、第12章にまとめている。

翻訳ないしは原典でこの叙事詩を読む方々に、本書が読解の一助となるよう願っている。  
(いしづか・しげきよ 現代語・現代文化学系 教授)

## 中谷陽二

「精神鑑定の事件史 犯罪は何を語るか」

(中公新書 1389)

中谷陽二著 (中央公論社)

[中央図, 医学図 498.99-N43]



異常な犯罪が発生するたびに精神鑑定が話題になる。本書は犯罪史上で知られたいくつかの事件を取り上げて精神鑑定の舞台裏をのぞいたもので

ある。登場するのは、レーガン大統領の暗殺未遂犯ヒンクリー青年、ビリー・ミリガンを筆頭とする「多重人格」の犯罪者たち、ロシア皇太子に向かって白刃を振った大津事件の犯人津田三蔵、今世紀初めに南ドイツで起きた大量殺人事件の犯人ワーグナー、その日本版とも言える、小説や映画のモデルになった津山事件の犯人都井睦雄、晩年に妻を絞殺したカリスマ的哲学者のレイ・アルチュセール、終戦直後の俳優仁左衛門殺しの犯人などである。

社会に衝撃を与えたこれらの事件の裁判では、精神鑑定のあり方を通じて精神医学の真実性が俎上に乗せられる結果になった。ヒンクリーに対する無罪評決は精神異常を理由とする免責制度への集中砲火を呼び、連続殺人犯ピアンキの裁判では多重人格の有無をめぐる鑑定人らが二派に別れて争った。アルチュセールに対する精神鑑定と予審免訴の手続きは、後にアルチュセールみずからによって辛辣に批判された。

精神鑑定にはさまざまな技術的困難があるが、それらがクリアされたとしても、なお陥穽が潜んでいる。詰まるところ、鑑定が診断する人とされる人の出会いであり、両者のこころのもつれ合いが演じられるからである。しかもそれは裁判というすぐれて演劇的な空間においてである。映画「タクシー・ドライバー」の熱狂的ファンで、ジョディ・フォスターのストーカーでもあったヒンクリーは、狂気とも正常ともつかないメッセージを放って鑑定人を混乱に陥れ、ミリガンは「虐待のトラウマに苦しむ多重人格患者」になりきって精神科医と心理学者の関心を見事にとらえた。かたやワーグナーを「典型的パラノイアの症例」として報告することで学問的野心を満たしたガウプ教授と、かたや文学的成功に執着し続けたワーグナーの間には、感情の深部で引き合うものがあった。

精神鑑定はなぜ誤りやすいか。それは人間のこころが厄介なものだからである。(本書は平成十年度講談社出版文化賞〔科学出版賞〕を受賞した。)

(なかたに・ようじ 社会医学系 教授)